オリンピック大会で日本最初の女性メダリスト

人見絹枝（１９０７―１９３１）

最初に参加した日本女性

多数の都市国家が存立していた古代ギリシャではアテネとスパルタが三〇年近く交戦したペロポネソス戦争を代表として、都市国家相互の紛争が数多く発生していました。その状況を改善するため、四年に一度、様々な紛争を休戦にして、スポーツ大会を開催するという行事が企画されました。大会は四種ありましたが、最大規模の大会がオリンピアという都市（図１）で紀元前七七六年から開催されてきたオリンピック大会です。

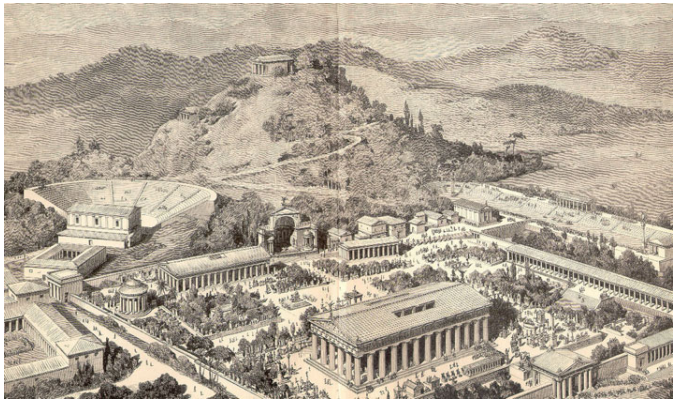


図１　古代オリンピア（右側にスタジアム）

これは男神ゼウスに奉納する大祭であることと、選手が全裸で参加していたため、女性は競技に参加することはできず、若年の女性と未婚の女性の観戦のみ許可されていましたが、既婚の女性は入場さえできませんでした。開催日数は五日で、主要な競技は短距離走、中距離走、戦車競争、レスリングやボクシングなどの格闘競技、古代五種競技でした（図２）。勝者への賞金も手渡されましたが、正式の賞品はオリーブの樹冠のみでした。

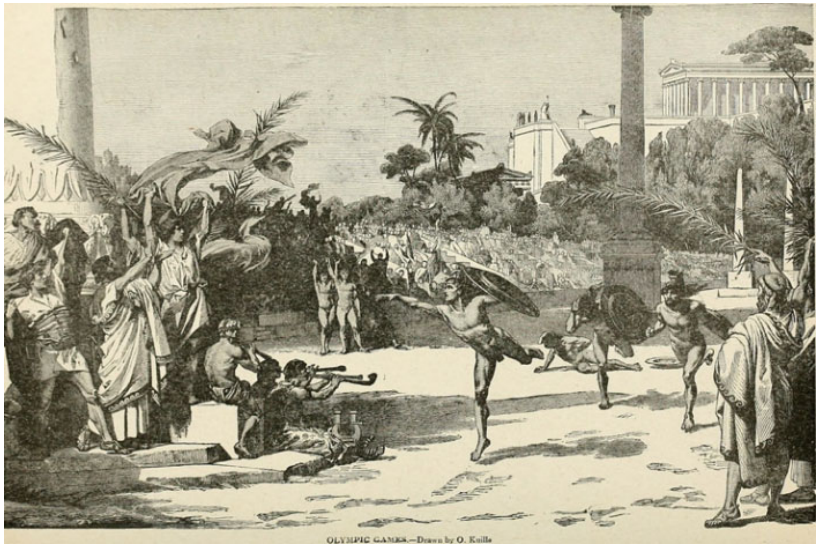


図２　古代オリンピック大会

図３　ストックホルム大会の日本選手団

この競技大会は西暦三九三年に開催された二九三回大会を最後に終了しましたが、その精神を継承して、フランスのＰ・ド・クーベルタン男爵が一八九六年に復活させたのが近代オリンピック大会です。そして参加資格も古代オリンピック大会を継承して初回は男性二八〇名が参加したのみで、女性の参加はありませんでした。日本が参加したのは一九一二年にスウェーデンのストックホルムで開催された第五回大会からです（図３）。

この大会には役員二名以外に短距離走に三島弥彦、長距離走に金栗四三の二名のみが参加しましたが、シベリア鉄道を利用する一八日間もの移動も影響し、予選敗退や途中棄権という結果でした。それ以後は次第に派遣選手も増加しますが男子選手のみで、ようやく一九二八年の第九回アムステルダム大会に日本からも女性が参加し、素

晴らしい活躍をしました。今回は日本から最初にオリンピック大会に出場した女性である人見絹枝を紹介します。

学生時代からスポーツで活躍

人見は現在では岡山市内になる岡山県御津郡福浜村で特産のイグサを栽培する裕福な農家の人見猪作と岸江の次女として一九〇七年一月一日に誕生しました。子供の時代から友達は女子よりも男子が多数という活発な性格で、地元の言葉で「ばっさい（おてんば）」と評判でした。地元の福浜尋常高等小学校尋常科に入学しますが、依然として活発で男子生徒を圧倒していました。しかし学業成績も優秀で級長に指名されるほどでした。

当時は女子が上級の学校に進学するのは例外の時代でしたが、人見の能力を理解していた父親の意向で進学することになり、倍率四倍の入学試験に見事に合格し、一九二〇年に岡山県立岡山高等女学校に進学しました。この学校は自宅から約六キロメートルの距離にある岡山市中心部にありましたが、毎日、徒歩で往復していました。これが以後、スポーツで抜群の能力を発揮する人見の足腰の鍛錬になったと推定されます。

当時の校長である和気昌郎は文武両道を目指す教育をしており、生徒がスポーツの対外試合に出場することを推進し、人見は早速、能力を発揮します。入学の翌年、岡山県主催のテニス大会のダブルスの競技に前衛として出場し、当時の女子としては異例の一七〇センチメートルの身長を駆使して活躍、前年優勝の岡山県女子師範学校のペアを打破して見事に優勝しました。その結果、人見は「関西第一の前衛」と評判になります。

一六歳になった一九二三年には岡山県女子体育大会に学校の代表として出場します。その時期に人見は脚気になっており、修学旅行にさえ参加できなかったのですが、学校の要請で走り幅跳びに出場しました。校医が同伴して試技が終了するごとに脈拍などを測定する決死の出場でした。ところが人見は四・六七メートルという日本女子最高記録を実現しました。人見としては優勝できれば、しばらく病気で寝込んでもいいという覚悟でした。

翌年には創設されたばかりの二階堂体育塾（日本女子体育専門学校の前身）に入塾し、創設した二階堂トクヨの指導により技量を向上させます。その結果、一〇月には三日も連続した高熱の直後にもかかわらず、岡山県女子体育大会の三段跳びで一〇・三三メートルという当時の世界最高を記録します。翌月には東京で開催された陸上競

技の全日本選手権に出場し、三段跳びで一〇・三八メートル、槍投げで二六・三七メートルを記録します。

ヨーロッパの大会で活躍

一九歳になった一九二六年に大阪毎日新聞社に入社しますが競技は継続し、次々と記録を更新していきます。そしてついに八月に世界に進出します。シベリア鉄道を利用して、車中で自炊しながら丸一ヶ月かけてスウェーデンの第二の都市ヨーテボリに到着、そこで開催された国際女子競技大会に単身参加したのです。初日には一〇〇ヤード競走で三位に入賞、円盤投げで二位に入賞します。円盤は現地で購入して数日練習しただけの成果でした。

初日に二五〇メートル競走にも出場して疲労が蓄積していたため、翌日は得意の槍投げを棄権して走り幅跳びに集中する作戦を選択しました。決勝では五回の試技まではイギリスの選手が一位でした。人見は途中の試技で着地のときにスパイクで右手に怪我をしていましたが、最後の試技で五・五〇メートルという世界最高記録を達成して優勝し、総立ちで拍手喝采する観客の眼前で日の丸が掲揚され君が代が吹奏されました。

最後の三日目には右手の怪我にもかかわらず六〇メートル競走で五位、立ち幅跳びで優勝しました。国別では二五人が参加して五〇点を獲得したイギリスが一位でしたが、人見一人で一五点を獲得した日本は五位になり、人見は個人優勝で金メダルを授与されました。すでに二〇世紀になっていたとはいえ、ヨーロッパの人々が想像する日本の女性は芸者という時代でしたが、人見は一人でイメージを変革したことになります。

次々と記録を更新

この遠征で外国の練習の事情を見聞した人見は、帰国して日本男子で最初に一〇〇メートルを一〇秒台で走破した同郷の谷三三五に指導を依頼し記録を向上させていきます。しかし日本でも橋本静子や双子の寺尾姉妹（正と文）など女子の走者が次々と登場する時代になっており、一九二七年に開催された第四回日本女子オリンピック大会では、五〇メートル競走で同着ながら橋本静子が一位になり、ついに国内で最初の敗戦を経験します。

それでも国内では断然の強者で、一九二八年の第五回日本女子オリンピック大会では一〇〇メートル競走と四〇〇メートル競走で世界最高記録で優勝、走り高跳と槍投げでも優勝します。さらに大阪で開催された第一五回全日本陸上競技選手権大会では

一〇〇メートル競走と走り幅跳びで世界記録を更新して優勝という桁違いの実力を発揮しています。人見は正真正銘の女性ですが、世間では男性ではないかという評判があったほどです。

八〇〇メートル競争の死闘

近代オリンピック大会を創設したクーベルタン男爵は女性の陸上競技への参加には反対でしたが、ついに一九二八年に開催された第九回アムステルダム大会で参加が承認され、人見は唯一の女子の日本代表として参加しました。陸上競技の一〇〇メートル競走、八〇〇メートル競走、円盤投げ、走高跳という個人で参加できるすべての種目に登録していましたが、一〇〇メートル競争で入賞したら、それ以外は棄権する予定でした。

ところが予選では一位でしたが準決勝で四位になり、決勝に出場できなくなってしまいました。当時は参加することに意義があるという感覚の時代ではなく、国家の代表として面目なく帰国できないほどの衝撃でした。円盤投げは競技が終了しており、走り高跳びは苦手のため、競技の経験のない八〇〇メートル競走に挑戦する選択をします。予選は無事通過しましたが、翌日の決勝は自信がなく、睡眠できないほど緊張していました。

九人の競走になりましたが、先頭の選手を追走し、最後の一〇〇メートルで先頭になる作戦でした。しかしトラックを一周した四〇〇メートルでは六位、六〇〇メートルで三位になり、最後の一〇〇メートルになったときに二位でした。しかし、その時点で人見の記憶は喪失していました。前夜の睡眠不足と一口のメロンだけという食事で体力の限界だったのです。しかし、一位のドイツのL・ラトケと二位の人見は世界記録でした（図４）。

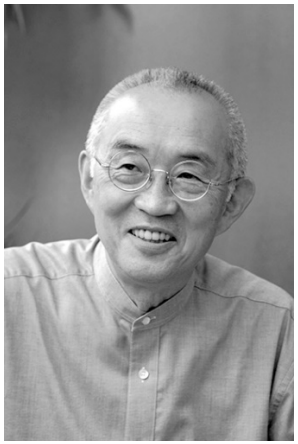
図４　人見とラトケ

人見は日本の陸上競技の女子で最初のメダリストになりますが、第二のメダリストは六四年後の一九九二年に開催された第二五回バルセロナ大会のマラソンで二位となった有森裕子まで登場しませんでした。いかに人見の活躍が素晴らしいことであっ

たかが理解できます。しかし過酷な競技だということで、この大会を最後に女子の八〇〇メートル競走は中止となり、三二年後に開催された第一七回ローマ大会まで復活しませんでした。

完全燃焼した最期

帰国してから一旦休養しますが、翌年から活動を再開し、後輩の育成にも努力します。一九三〇年九月にはプラハで開催された第三回国際女子競技大会に五人の後輩とともに参加、さらにワルシャワで開催されたポーランドとの対抗競技大会、ベルリンで開催されたドイツとイギリスとの対抗競技大会、ブリュッセルで開催されたベルギーとの対抗競技大会、パリで開催されたフランスとの対抗競技大会に次々と出場し、一一月に帰国しました。短期に五回もの国際競技大会に出場し疲労困憊でしたが、帰国してから、応援してくれた団体などへの挨拶に忙殺された結果、強靭な肉体も対応できず、翌年三月に入院することになりました。しかし病状は悪化し、一九三一年八月二日に「息も脈も高し されど わが治療の意気さらに高し」の辞世の言葉とともに二四歳で死去しました。一九二八年のアムステルダム大会の八〇〇メートル決勝でラトケと死闘をした三年後の当日でした。



つきお よしお　１９４２年名古屋生まれ。１９６５年東京大学部工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授などを経て東京大学名誉教授。２００２、０３年総務省総務審議官。これまでコンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策などを研究。全国各地でカヌーとクロスカントリーをしながら、知床半島塾、羊蹄山麓塾、釧路湿原塾、白馬仰山塾、宮川清流塾、瀬戸内海塾などを主催し、地域の有志とともに環境保護や地域計画に取り組む。主要著書に『日本 百年の転換戦略』（講談社）、『縮小文明の展望』（東京大学出版会）、『地球共生』（講談社）、『地球の救い方』、『水の話』（遊行社）、『１００年先を読む』（モラロジー研究所）、『先住民族の叡智』（遊行社）、『誰も言わなかった！本当は怖いビッグデータとサイバー戦争のカラクリ』（アスコム）、『日本が世界地図から消滅しないための戦略』（致知出版社）、『幸福実感社会への転進』（モラロジー研究所）、『転換日本 地域創成の展望』（東京大学出版会）など。最新刊は『凛凛たる人生』（遊行社）。